

第20回「京都御苑ずきの御近所さん」

京舞井上流 五世家元

井上 八千代 様



■井上流の舞の魅力について、お話し頂けますか？

井上流の舞は、動きも少なく、派手派手しいものではありません。他の踊りには、男性が激しく躍動感たっぷりに動くものや、歌舞伎舞踊のような豪華絢爛なものがありますが、井上流の舞はそれらの踊りとはちょっと違う、静かなものです。動きが本当に少ないので、大きな空間よりも、芸妓さんがお座敷で舞うような、間近で観てもらう方が良いかもしれません。ゆったりとした曲に乗せて、じっくり舞っている姿を観て、「噛めば噛むほど面白い」と思って頂くことが私たちの願いです。唄の言葉もそんなに多くはなく、「都」という言葉でしたら、長唄では「みやこ」ぐらいのテンポですが、私どもは「みーやあこおー」ぐらいの長さで、のんびりとしたものです。唄を聞いただけで、すぐに何を言っているのか分かるのかということ、私どもでも分からない時がありますが、確かに、中には「露」とか「涙」とか、日本人の心の琴線に触れるような言葉があります。お客様と「時と時間」を共有することで伝わる何かがあると思います。

その一方で、もっと楽しい舞を観て頂くべきという思いもあります。お客様にご覧いただき、心地よい気分になって時には共に身体を動かしたくなることもあります。

私の場合、祖母の舞を見ていると、元気が出ました。静かで、何でも無い舞でしたが、やっぱり悲しい舞でも、寂しい舞でも、確かに「人」がそこにある、ということを表していたと思います。

みなさんにご覧いただく京舞でしたら、やはり大きなところで言えば、都をどり。今年は祇園甲部にある歌舞練場を閉めておりますので、春秋座で催されました。修復になるか改築になるか、まだ分かりませんが、いずれにしても、是非とも足を運んで頂きたいと思います。百年後も祇園甲部歌舞練場で都をどりをとっていただければ、御賛同を頂きたいですし、一回も見たことがないから、歌舞練場が綺麗になった時に見たいわ、という方にも、是非お願いしたいことです。それから、四、六、九、十二月の七日に「澁の会」というものを開いています。日付がずれることもありますし、唄は録音テープで流しておりますが、京舞を間近にご覧いただくことができます。また、祇園の催しとしては「温習会」というものが十月一日から六日に開かれます。祇園の芸舞妓さんの芸の研さんのためのおさらい会のようなものです。やはり今年は歌舞練場が閉まっているので、春秋座で開くことになっています。

時々、「週一回ぐらい、何か催しがあったらいいのにね」と御意見を頂きます。京都にはお寺がどこにでもありますので、演目がそんなに変わらなくても、せめて月一ぐらい、何らかの形で続けてみるのも良いかもしれません。私の娘やお弟子さんたちが、外へ出向いて、舞わせて頂いても良いかもしれません。冷泉さんが「御所の中でも、べっぴんさんがおすべらかしで舞わはったらええのになあ」と、何年前かに言っておられたことがありました。それは素晴らしいことですが、御所の中はなかなか難しいだろうなと思いました。

■著書『京舞つれづれ』には、四世八千代様の「人となり」や「ニン」について詳細に書かれています。五世である井上様の「人となり」「ニン」などについて教えてくださいませんか？

「人となり」は、人に言ってもらえるものですから、自分では分かりませんが、やっぱり不器用だと思います。どちらかと言うと、人に言われたことや色んなことを気にする質です。そういう意味では、「生真面目」なのですが、それが「気難しさ」につながっているなあとと思います。自分の思っていることと違うことを言われたとき、どうすれば良いのかすぐに分からなくなり、固まってしまうことが欠点です。優先順位を考える中で、「自分がこれをしなければならぬ」となると、今は周りのみんなが私のペースに合わせてくださり、有難いと思いますが、やはり私が気をつけて、周りの方に温かいものを伝えられるようにならなければ、と思います。平常心を保って、周りを和ませられるような雰囲気の人になれたらいいのになあ、もっと穏やかでいたいなあとと思います。還暦を過ぎて、あたり前のことですが、なかなか実現できません。

「ニン」については、私の師匠である四世井上八千代は、満98才まで生きましたが、とても可愛らしいところがありました。少女のようでもあり、女らしい部分があったので、それが芸の上でも「瑞々しさ」に繋がっていたと思います。私に欠けているものは、これだと思うんです。今も申した、「人となり」、要は「柔らかみ」です。もちろん、芯はないといけませんが、身体の周りが柔らかく見えると言いましょか、動き方もあるとは思いますが、そういう心持ちがないといけないのかなあとと思います。

ただただ頑張るだけでは、いろいろなものを表すことはできません。

身体的なことでは、基本動作として「おいど（お尻）をおろす」というものがあります。その基本姿勢では、丹田（お腹）に力を入れつつ、周りを柔らかくする、という技術をつかむことが大切です。それと同時に、精神的にも、芯は硬くとも、どこか柔軟性がないといけません。

例えば、怒りがこみ上げて、それを表現することができれば、それはそれで素晴らしいと思いますが、それだけでは面白くありません。人には喜怒哀楽がありますから、生活の中にある様々な姿、一人の人間の様々な心を写せるぐらいにならなければ、と思います。思うばかりで、なかなか思うようにはいきませんが、

■思い出の中で、京都御苑にまつわるものはありますか？

母の実家が、寺町丸太町付近にありました。そちらに遊びに行きますと、年の近い従兄弟がいたので、時間のない時は隣の御霊さんで、学校が休みの日など時間がある時は、御所へ行ってどんぐりなどを拾って遊んでいました。当時は迎賓館もなかったし、ちょっとしたドッチボールができる場所が、もっとたくさんありました。車に煩わされることもなく、広いところで自由に遊べました。御所で遊べるのは、母の実家に行った、特別な時だけでした。

子どもの頃、御所の中には、どこかも分からない場所から勝手に入っていたので、遊んでいた場所はどこだったんだろう、と思って、この前お天気の良い日に行ってまいりました。前の晩から、どこから入ってどう行こうか、と考えていました。私がずっと行きたいなと思っていたのは拾翠亭です。

当日、堺町御門から入り高倉橋の上から眺めた景色が美しく、拾翠亭の二階だったらもっと目線が高いし、景色が綺麗だろうなあと考えていたのですが、その日はちょうど貸切りで入れませんでした。残念やなと思いつつ、そこから進んで、建礼門の正面をちょっと行くと、北山と東山、両方のお山が見えました。両方のお山が見える場所って意外に少ないので、これもええなあと思いました。他にも、いろいろ見させてもらいました。迎賓館も、完成してすぐの頃に行かせて頂きましたが、公開も始まったことですし、また行ってみたいんです。やっぱり、石のひとつや植木など随分と変わっていて、苔むしてる部分も、時を重ね自然につくられるものがないとあか

んのやなあと思いました。御苑も同じだと思うんです。手入れをしておられる部分があるけど、自然のままの部分もあって、それが素晴らしいなと思います。

祇園近くに住んでいると、やっぱり東山界隈を散歩することが多くて、御所の周りへはなかなか行きませんが、この間は、こんな風にいろいろと見る事ができて楽しかったです。

■また、京都御苑で好きな場所、好きな時期などありますか？

拾翠亭とは今まで縁がなかったんですが、入ってみたい、というのは願いです。高倉橋から建礼門の方向ではなく、裏を回って拾翠亭に行く道も好きです。

先日も、御所をいろいろ見て回りましたが、紫式部が通ったとか、禁門の変でどれくらい焼けてしまったのだろうかとか、滅びてはよみがえる自然や人々を思い起こし乍ら巡ることができるというのが良さだと思います。

■京都御苑の今後について、御意見などございましたら自由におっしゃってください。

申し訳ないのですが、本当に「京都御苑」ってあまり言わなくて、私の感覚ではどうしても御苑と御所が一体化しています。迎賓館なども含めて、別個の物というようにはなかなか捉えがたいです。やっぱり京都に天皇が住まれた御所があるということが、京都人の心の支えの一つなんです。どこがどこの管轄かは分かりませんが、どこかで一体化する方向で考えてほしいと思います。

あんなに広い御所ですが、24時間いつでも開いています。今の時代、ポッと自爆テロを起こすような人が行くことでもあったら…と思うと、ある意味、恐ろしいことではあるなあと思いますが、これが日本の良さなんだろうなとも思います。歴史がありながら解放されている、これがやっぱり御所の良さで、その中で暮らしてこれたということに、日本人としてありがたく感じないといけないなあをつくづく思いました。

建物に関しては、御所の中、仙洞御所、大宮御所にも近々行きたいなあ、と思っております。その時には、分からないことも多いので、ちゃんとレクチャーしてもらえると良いですね。里内裏というのでしょうか、御苑にはいろいろなお屋敷があったそうですが、どういう風にあったとか、御所水道はどのように通っていたのか、禁門の変でどうなったのか、とか教えてもらいながら散策できると良いと思います。

それから、中山邸跡。明治天皇の産湯の場所といたら、日本の歴史の大切な場所ですから、あそこを何とか復元できればいいなあと思います。やっぱり、つくられたことの歴史が違うと思います。迎賓館ももうちょっとたくさん使うように、皇族の方がいらっしゃった時にも泊まってもらうようにしないと、建物に血が通わないように思います。

それから、一度は御所で舞わせてもらいたいという夢があります。毎年一月の始めに伝統技術を保つための集まりがありますが、私が子どもの時に、一度だけ御所の建物の中で、祖母が舞うのについて行ったことがあります。その後、すぐに御所の中ではなく、他の場所が変わってしまったので、もう夢ですけど、御所を使わせて頂いて舞えるのなら、そんな素晴らしいことはないと思います。

他にも、私どもの「都をどり」についてですが、明治四年に開かれた京都博覧会は準備不足だったので、満を持して開催した明治五年の京都博覧会で披露したときの都をどりが、第一回だと聞いていたんです。でも、資料によっては、明治四年の京都博覧会を第一回とするものもあります。御所の資料館（閑院宮邸跡収納展示館）では、確か明治六年の博覧会が第二回と展示してあったと思います。明治何年に開催された博覧会が第一回なのか、よく分かりませんし、博覧会がどういう風に催されたのか、興味があります。博覧会のとき以外にも、いろいろ御苦労をなさっ

た時代があったんだなあと思うと、感慨深いものがあります。

それから、折角売店まであるのですから、もう少し御所の歴史やお話を書いた、薄い冊子や本があるといいなあと思います。御所でしか買えない物を、是非よろしくお願いします。

2017年6月1日 インタビュー

聞き手：田村省二，積田真希子

○井上八千代さま プロフィール○

1956年、観世流能楽師片山幽雪（九世片山九郎右衛門）の長女に生まれ、祖母井上愛子（四世井上八千代）に師事。2000年、五世井上八千代を襲名。2013年、紫綬褒章を受章、2015年、重要無形文化財各個指定（人間国宝）に認定。著書に『京舞つれづれ』（岩波書店）がある。